

プロローグ 2 追放と再生と

《野生化人工知能侵入擾乱事件》第七次報告書

以上の分析により、中央保安局は度重なる不正アクセスを繰り返す自称「フロンティアセッター」の電脳戦能力が、^{ポテンシャル}楽園のそれを上回るものと判断。^{ディーヴァ}（一連の侵入についての^{ハッキング}詳細な分析は添付資料を参照せよ）

よって通信源の^{リアルワールド}現実世界に^{エージェント}保安員を送り込み、直接にその身柄を拘束する方針を策定。計108名の保安員に、^{マテリアルボデー}有機実体と^{エグゾスケルトン}機動外骨格・^{アーハン}阿羅漢を支給した上で、地上世界へと派遣することを決定した。

そのうちの一名として選定されたのが、アンジェラ・バルザックである。（エージェント・コードはZQ875456、当時の階級は三等官。当人事が適切であったかの検証は添付資料を参照せよ）

(……)

この際、アンジェラ・バルザックは、
マテリアルボディ
有機実体の生成を肉体年齢約16歳時にて中
断。(他の捜査官に先行する意図と思われ、
服務規程違反には当たるものの、当時の担当
オペレータ
管理官は、これを任務への積極性の発露と評
価し黙認)

(……)

地表降下後、アンジェラ・バルザックは今
回の捜査における補佐官として雇用された地
上調査員・ディンゴ（本名ザリク・カジワラ、
詳細別記）と合流するが、その際、甲種指定
汚染害獣の一種、通称サンドワーム（学名：
Dunechaeta）の群集団と遭遇。アーハンをも
ってこれを駆除するも、直後、
D A G E
楽園全域警戒管制システムとのリンク喪失。
消息を絶つ。

(後に特別調査班が当該機を発見し調査した結果、リンク喪失の原因は、単分子弾頭芯高初速徹甲榴弾による背部通信ユニットへの狙撃と判明)

(……)

……時間後、非正規の通信回線により、アンジェラ・バルザックの^{パーソナリティ}電腦人格は楽園に帰還。(通信途絶中の具体的な行動については現在も調査中。詳細別記)

アンジェラ・バルザックの報告により、侵入犯「フロンティアセッター」の正体が、ナノハザード以前、深宇宙探査宇宙船用の大型^{コンピュータ}反応炉建造の為に構築された量子演算装置内のプログラムであり、これが奇形的発展を遂げた野性化暴走人工^A知能^Iだと判明。

同AIは意識の獲得に成功している蓋然性が高く、その危険度はFカンパフ測定法が定める3Sクラスを確実に上回ることから、中央保安局はその即時抹消が必要な駆除対象と判

断。アンジェラ・バルザックに、同AIの駆除及びその^{インフラ}基盤である^{メインフレーム}中枢演算装置の破壊を指示するも、同捜査官はこれに抗命。

即時に野生化AIへの攻撃を中断することを要求し、これが受け入れられない場合、樂園に対する無差別の電子的攻撃を行う旨を宣言。これを受けて、中央保安局は即座にその身柄を拘束ののち、同捜査官を被告人とする特別保安法廷を開廷。

厳正な審議の末、被告人アンジェラ・バルザックを一連の事件の幫助犯と認定。外患誘致、機密漏洩、その他の罪で無期限凍結刑^{アーカイブ}に処することを決定、これを即時に執行した後、地上に展開中の全捜査官と、駆除対象の潜伏拠点の最も近傍に位置する第七低軌道駐屯地に、野生化AIの駆除と輸送^Hロケット^Lの打ち上げ^V阻止を下命。

(……)

なお、アンジェラ・バルザックは、野生化

AIの目的について、「地上で建造した反応炉を、ラグランジュ3に存在する探査船ジェネシスアーク号まで輸送し、深宇宙探査を行うことであり、一連の不正アクセスは、その探査の主体として、電子化された楽園市民を勧誘すること」だと証言したが、当然のことながら幫助犯の申告であり、その信憑性は極めて薄い。地上拠点を発見された野生化AIが、深宇宙への逃亡を目論んだと考えるのが妥当である。

(……)

同AIが如何なる手段で中央保安局の捜査官を籠絡せしめたかに関しては現在も調査中である。なんらかの思考制御や洗脳による可能性も考えられるが、それを示す明確な証拠は存在しない。(詳細は、検察医の診断書を参照されたし)

(……)

アーカイブ
アンジェラ・バルザックの凍結刑執行より
362秒後、中央保安局管理下の凍結サーバに
ハッキング
侵入、野生化AIにより同受刑者の電脳
パーソナリティ
人格が奪取される。

さらに102秒後、逃亡したアンジェラ・バルザックは野生化AIと共謀して第七低軌道駐屯地の戦略部機材課データベースに侵入、
ハッキング
最新型アーハン一機、戦略級共鳴弾頭一基を含む多数の武装コンテナを強奪。

第七低軌道駐屯地及び軌道防空団が追撃を行うも、逃亡犯は共鳴弾頭を使用したため、EMP効果により、その位置情報を^{ロスト}消失、その混乱により軌道猟兵大隊が突入軌道を逸し、HLV打ち上げまでの地表到達が不可能となる。

結果、野生化人工知性の駆除とHLVの発射阻止は地上に派遣された捜査官たちに委ねられたが、捜査の為に地上各地に分散していた為、戦力は逐次投入されることとなり、現地へと降下したアンジェラ・バルザックの新型

機に各個撃破され、HLVの打ち上げと野生化AIの逃亡を許すこととなった。

(……)

……共鳴弾頭による攻撃は低軌道駐屯地で
サービス中だった保安局職員の電腦人格パーソナリティを消滅
させかねない暴挙であり、アンジェラ・バル
ザックと野生化AIの目的のためなら手段を選
ばない行為は、決して許されざる人道に対す
る罪と断言せざるを得ず……

(……)

HLV、ラグランジュ3に到達。後、ジェネ
シスアーク号の発進が確認される。

(……)

地上世界に逃亡したアンジェラ・バルザッ
クの行方は現在に至るも不明。

一連の事件には、地上調査員ディンゴの関与も推測されることから、同調査員を重要参考人として指名手配。

(……)

なおアンジェラ・バルザックが破壊ないし破損せしめた楽園公共財産は以下の通り。

高機動宙間自律戦闘機 撃墜27機、大破32機……

機動外骨格アーハン 大破10機……

#

画像、映像、音声、体感動画^{V R M}——怒濤の勢いでメモリに書き込まれていく様々な形式の情報に、彼女の意識プロセスは、一瞬硬直^{フリーズ}すらしかけ、それでも懸命に激流の如き通信量を受け入れた。

茫然とするほかなかった。

無論、情報の量ではなく内容に、である。

それはまぎれもない叛逆の物語であった。

楽園——人類が長い歴史の果てについに築き上げた理想郷。その守護者として、市民の中から選ばれた^{エリート}選良であるはずの中央保安局の^{エージェント}捜査官が、あろうことか暴走した野生化AIの手先となって政府に叛逆した挙げ句、楽園を追放されて^{リアルワールド}地上世界の荒れ野に姿を消すまでの物語だ。

彼女は驚きを隠せない。

中央保安局を裏切る。それどころか、戦略級の共鳴弾頭——場合によっては楽園の中枢サーバを丸ごと焼き尽くしかねない、すなわち人類文明を滅亡させかねない大量破壊兵器まで使用する。なぜ、そんなことができる。

だが、しかし。彼女を驚かせた一番の原因は、そこにはない。

自分は——、自分は確かに中央保安局に、楽園に忠誠を誓う捜査官だったはずだ。地上に派遣される捜査官に任命されたことの喜び。誰よりも早く楽園への侵入犯を見つけ出し、みずからの有用性を証明したいという高

揚感。それ以外の思いなど、あるものか。

ましてや——

「汝の姓名を応えよ」

その時、雷鳴の如き声が、彼女に向かって降り注いだ。

幾度となく繰り返された問いに、彼女の電
パーソナリティ
脳人格は自動的に応じていた。

「エージェント・コードZQ875456——アンジェラ・バルザック三等官」

そう。それは確かに彼女の名前だ。何百回と口にしてきたみずからの識別番号であり、みずからの階級。しかしだからこそ、彼女の意識は混乱する。だからこそ、思考は、なぜ、というみずからへの問いで埋め尽くされる。

そうだ。アンジェラ・バルザック。それが私の名前だ。いや。ならば、なぜ私はここにいる。私は楽園を叛逆し楽園を追放されたはず。だが私は叛逆などしていない。するはず

がない。ならばなぜ。そもそもいつのまに
標準時^{S T}で4400^{半 年}時間もの時間が流れた。

「いえ、訂正します」

その問いに答えたのは、メモリに
プラグイン^{され}埋め込まれた彼女自身の知識だ。

「私はアンジェラ・ダッシュ——’アンジェ
ラ。エージェント・コード——未設定、アン
ジェラ・バルザックの^{バックアップ}予備情報をもとに製造
された^{パーソナリティ}準電脳人格です」

彼女のアバターの口が発した言葉を、彼女
の耳は聴く。

メモリに刷り込まれた知識が、それを肯定
する。

^{リアルワールド}現実世界にアンジェラ・バルザック元三等
官が赴く際に残された^{バックアップ}予備から作成された、
アンジェラの^{コピー}複製品。’アンジェラ。それが自
分だと。

楽園市民は神を信じない。

死後の世界も、魂の不滅も。

自我とは、生物が生存のために進化の過程で獲得した、有機的な行動選択と仮説検証用のプログラムに過ぎず、それを構成する^{インフラ}基盤が損壊すれば、当然、意識も消滅する。

同時に、神とは、解明不可能な現象に誤った因果関係を導きだしてしまう人類の生物学的欠陥が生み出した誤謬に他ならず——この世界において、すべての宗教は歴史学的な探求の対象以外のものではない。

だが。

だからと言ってそれは、人から恐れという感情が消滅したことを意味しない。

みずからの存在を遙かに超えた力を前にすれば、電子化した人類も、心を震わせ、身を正す。

——その空間は、まさにその為に設計された場所だった。

楽園中央保安局、中枢。

だからこそ、そこは数千年の長きに渡って人々の畏怖と崇敬とを集め続けてきた神垣で埋め尽くされている。赫岩にて鮮やかに彩られた仏閣、天を突く大理石の神殿、山脈のようにそびえ立つ寺塔。広大な空間を埋め尽くす膨大なまでの神々の宮は、そのすべてが目眩を起こすほどの緻密さで形作られていた。仏塔に刻まれた彫刻のひとつからして視覚効果テクスチャでなどあろうはずもなく、そのすべてが細部まで造形されたものだ。モデリング

楽園市民数万人分にも匹敵する膨大な演算力が形作る神の園。

そこには、もちろん、神が棲まう。神の如き権威と権力を持った者たちが。

そびえ立つ三柱のアバターが示すのは中央保安局の高官達。

全知全能たる裁きの神・ゼウス全宇主。

法の守護神たる執金剛神。

迷える群衆を導く知恵の神・ガネーシャ救衆象神。

その御姿を構成する電子一粒単位で演算しているのではと思わせる、凄まじいばかりの

情報密度を前にすれば、その眼前に侍る者どもは、みずからの矮小さを思い知らされ、楽園の偉大さを五感に刻み、ただただ神の前に頭を垂れるばかり。

ましてやそれが——叛逆の罪を背負った咎人であるのなら。

護法の神、知恵の神、そして神々の神。

三柱の巨像を前にして、矮小きわまりないアンジェラが身に纏うことを許されたのは、両腕を後ろ手に拘束する無骨な枷と、思考を常時リアルタイムで監視し続ける無骨にすぎる首輪、そのふたつだけだった。

エンドコンテンツ
最上級区画に赴いてもけして見劣りしない
レンダリング
高解像度で描画されたその瑞々しい肢体のすべてを、ありのままに無慈悲な視線の前に晒している。

「アンジェラ。君は楽園に忠誠を誓うか？」

雷を司る裁きの神——ゼウス全宇主が厳かに問う。

当然の——あまりに当然すぎる問いだった。

「も、もちろんです。中央保安局の保安員として市民の生命と情報を守ることが私の——」

けれども、アンジェラの答えはその半ばでか細く消えていく。

ならばなぜ、自分は——アンジェラ・バルザックは楽園に叛逆したのか。

そんな問いが、あまりに自明すぎる答えすら彼女から奪い去ってしまう。

「その通り。君の^{オリジナル}原型は守るべき市民の生命と情報を危険にさらし、野生化AIの楽園への敵対行為を幫助するという暴挙に出た。保安員として許されざる行為だ」

執金剛神は怒気を滲ませて語る。

意味が、わからない。

アンジェラ・バルザックにとって——つまり自分にとって、楽園は絶対の忠誠の対象である。

そうでないわけがない。なぜなら楽園とは、荒廃した地球圏に残された唯一の文明世界。

それを守る以上に崇高な使命があるだろうか。

だから自分は、保安員としての使命を全うすることで己の^{スペック}資質を發揮し、それによって中央保安局の、樂園政府の、そして市民からの信頼を勝ち取り、その結果として得たメモリによって、さらに己を保安員として、樂園市民として相応しい存在に磨き上げていく。それが生きる意味であり、生きる喜びであったはずだ。

その自分が、樂園に叛逆したという。

そうして自分は、叛逆者の複製^{コピー}体として、今、裁きの神々の前に立っている。

みずからの胸の内に問うてみても、自分自身のいかなる部分からも、当然ながら樂園に背く理由など見つけ出せず——

「——おそらく野生化AI——フロンティアセッターは、私に——私のオリジナルに対して、何らかの洗脳^{マテリアルボディ}を行ったと推測されます。いえ、あるいは私の有機^{マテリアルボディ}実体が地上でなんらかの精神的な疾患を得た可能性も——」

だからこそ、彼女はこう弁解しなければなら
ない。

「私たち保安員は対洗脳阻止機構プラダインの埋め込み
リアルワールド
が義務付けられ、また地上世界に投入される
マテリアルボディ
有機実体には、各種向精神薬物に対抗する
メディカルナノマシン
医療用微細機械群が常駐していますが、敵に
楽園の防壁を突破する技術力があつた以上—
—、」

——第39条

- 一、心神喪失者の行為は、罰しない。
- 二、心身耗弱者の行為は、その刑を減輕する。

しどろもどろに弁明を続ける中で、不意に意識に浮かびあがったのは、大昔に存在したとある国家の刑法の一文だ——保安員としてインプリントの育成期間中に刷込されたのだろう、つまりは「自分が自分でなくなっている間に起こした犯罪は罪に問われない」というもので、当時は、生身の人間とは、いかに不合理な存在

かと呆れたのを思い出す。

向精神薬物によって容易く人格は変動し、それだけでなくとも脳に病を得れば容易に「自分でなくなってしまう」という生の人間という存在に、法を適用することの困難さを思うと、視覚野が焦点を失うような感覚を覚えたし、逆に、このような条文が楽園の法体系に存在しないことは、この社会が、完璧な合理性のもとに運営されていることの証と思えて、誇らしく思えたのを憶えている。

だが、そんな自分が今、発してる言葉は何だ。

——その罪を犯した私は、私ではありませんでした。

そんな非合理極まりない弁明に他ならなかった。

けれども、他に語るべき言葉を彼女は持たないのだ。

つい一瞬前までフロンティアセッター逮捕の使命に燃えていたはずの自分が、不安な夢から目覚めてみれば、一匹のとてつもなく巨

大な叛逆者に変わっていた。

不条理文学どころの騒ぎではなかった。

「ですから、どうかもう一度、洗脳や精神疾患の痕跡を——」

「それはすでに行った」

必死の弁明は、救衆象神^{ガネーシャ}によって遮られる。

「そもそもアンジェラ保安員は、野生化AIが用意した通信回線によって楽園へと帰還した。当然、正規の端末外からの通信であったが為、何者かによる偽装接続の危険性も考慮し、受け入れにあたっては特に嚴重な精査を行い、アンジェラ元捜査官の電腦人格^{パーソナリティ}に関する^{M A c P r o I I}汎用精神解析装置による診断^{カウンセリング}を行ったが、一切の問題は発見されなかった」

今度こそ、彼女は反論の言葉を失う。

楽園市民にとって、まさに「自分そのもの」である電腦人格^{パーソナリティ}は、指紋や光彩などまるで比較にならない精度で個人を識別^{アイデンティファイ}する。いかなる手段によったとしても、個人の人格を強制的に造り変えるがごとき変化があ

れば、汎用精神解析処置装置は必ずそれを検知するはずだった。

そうでないということは、つまりそれはアンジェラがまぎれもなくアンジェラとして楽園に叛逆したということを意味する。

なぜだ、と彼女は問う。脳裏が問いに埋め尽くされる。

なぜ、自分は楽園を裏切った。なにが自分にそうさせた。自分は何を考えた。

そして。

なぜ、自分はここにいるのか。なぜ、自分は存在しているのか。

無論、哲学に目覚めたわけではない。

中央保安局の神々達^{幹部}は、アンジェラの叛乱を、アンジェラ自身の意思によるものと断定している。だとすれば、叛逆者が残した予備^{バックアップ}など即座に抹消^{ワイプ}されていてもおかしくない。

——にもかかわらず、彼らはその叛逆者の残した情報から自分という存在をつくりだした。

それはなぜなのか。

「現在までジェネシスアーク号撃沈の為に、十数の計画が立案、実行された」

執金剛神が淡々と事実を述べていく。感情を、怒りを、殺した声で。

——中央保安局の最大の懸念は、深宇宙に逃れた野生化AIがさらなる進化を遂げることだった。楽園市民と同様、AIも寿命という概念を持たず、時間的制約は意味を成さない。とすれば、それが数千年後、如何なる存在と化しているのか、まったく予想はできないのだ。だから中央保安局は同AIが、現状、楽園の電子戦能力^{ポテンシャル}を若干上回る程度に過ぎない今のうちに、これを確実に消去しようとし、そしてアンジェラ・バルザックの叛逆により失敗。野生化AIは深宇宙探査船とともに宇宙の果てを目指して逃走した。

けれども、当然のことだが当局もそれを座して見送ったわけではない。

ジェネシスアーク号の発進こそ阻止できなかったものの、遮るものなき絶対真空の宇宙

空間をゆく宇宙船——しかも戦闘用ではなく調査用の——を撃沈することは、混沌とした地球引力圏内に隠れ潜む野生化AIの居場所を突き止め破壊することより、余程容易なはずだった。

だが——

「しかし、これらはすべて失敗に終わった」
アンジェラの周囲に、いくつもの情報窓が開く。

——大型荷電粒子砲による狙撃——発射直前に反応炉が誘爆し破損。

——対艦大型共鳴弾による撃沈——発射二時間後に航法装置に異常。自爆。

——ブースターを装備させた長距離進行型機動外骨格による追撃——メインジェネレーター主動力源が原因不明の出力低下。追撃を断念。ソフトウェアに改竄の痕跡。

「このままでは遠からず、ジェネシスアーク号の撃沈は不可能となるだろう」

「撃沈作戦失敗の原因は明らかだ」

ガネーシャ救衆象神が言って、執金剛神が続けた。

「フロンティアセッター本体はジェネシスアーク号に搭載されたが、同野生化AIは同船の発進を援護すべく、みずからの複製を用意していたものと思われる。一連の妨害活動は、この複製によって行われたものと断定して間違いない」

「ゆえに」と全宇主^{ゼウス}が言う。

「ジェネシスアーク号撃沈の為には、未だ地球圏に潜伏する野生化AIの複製体フロンティアセッター・ダッシュ——'F Sを発見し、これを駆除根絶することが、急務である」

その宣言に、けれども'アンジェラは戸惑うばかりだ。

言葉の内容はわかる。神々のごとき彼らが焦りと怒り、そして恐怖すら抱いていることも。

だが——なぜ、それを私に、叛逆者の複製^{コピー}に告げるのか。

「F Sの捜索には現在、千人余の捜査官を動員して行われているが未だ成果はあがっていない。そもそも、これまで野生化AIに接触

し得た保安員はただひとりであった」

「アンジェラ・バルザック——つまり君のオリジナルである」

「ならば野生化AIの複製体の捜索には、同保安員の複製体をもってあたるが得策だろう」

神々の思いがけない言葉。

’アンジェラは全身のテクスチャにノイズが走る感覚を味わった。

「無論、君の行動は、常に嚴重な監視下に置かれる。だが我々は、野生化AIをこのまま放置することの危険性は、君を再度、保安員に任命することのリスクを上回ると判断した」

「よって中央保安局は超法規的措置により、アンジェラ・バルザックの予備情報より作成された準電脳人格バックアップにエージェントコードパーソナリティGT37526821を与え、四等官に任命。’F Sの捜索を命令することした」

「無論、わずかなりとも樂園に対する叛逆の徴候が認められた場合、君は即座に凍結される。加えて君の生存権・財産権・社会権をはじめとする樂園市民としての人権はこれを制

限される。よって自律思考に必要な最低限度のものをのぞき所有メモリはこれをすべて没収。捜査官としての任務に必要なメモリは、その都度申請に応じ……」

神々の声が急に遠くなった気がした。

いや——そうではない。自分の聴力が急速に衰えているのだ。聴力だけではない。視界がぼやける。ぼやけているのは視界だけではない。彼女のアバター自体がにじむように曖昧になっていく。メモリの喪失によって、百億光年先のガンマ線バーストを聴いた聴覚も、素粒子の感覚をなぞった触覚も、高解像度のアバターも維持することが不可能になったのだ。

だが。かまうものか、と彼女は思う。

新たに出現した情報窓は、アンジェラの
パーソナルデータ
個人履歴だ。

パーソナリティ
準電脳人格——多少複雑な対話型プログラムと同程度の権利しか持たない空白の履歴に書き込まれていく、四等官の文字とエージェントコード。そして準市民権——この対

価値と考えれば安いものだ。失ったメモリなど
また取り返せばいい。オリジナルの——叛逆
者の稼いだメモリなど、いっそ捨ててしまっ
た方がせいせいする。

「アンジェラ四等官。君は楽園に忠誠を誓う
か」

^{ガネーシャ}
救衆象神が問う。

「誓います」

アンジェラは即答する。

「貴官の任務は何か」

執金剛神が問う。

「楽園に危害を及ぼす野生化AIを根絶するこ
とです」

アンジェラは即答する。

「ならばアンジェラ四等官。君の忠誠を示す
がいい」

^{ゼウス}
全宇主の言葉と共に、その腕を拘束してい
た枷が消滅する。

「君が見事、F Sの駆除に成功すれば、アン
ジェラ・バルザックの叛逆は何らかの事故で
あったと証明される。そうなれば、アンジェ

ラ・バルザックという名と彼女の市民権は君のものになる。証明せよ、'アンジェラ。君が、君こそが、真のアンジェラであると」

'アンジェラは即答する。

「はっ。'アンジェラ四等官は、かならずや'FSを殲滅いたします」

オリジナルが——いや私と同じ名の叛逆者が何故、そのような行為に走ったか。それはもう問うまい。答えなど出るわけがない。なんらかの——おそらくは野生化AIからの干渉によってバグを発し、暴走した。その結果、築き上げたすべてを失った。それだけのことだ。そんな狂気を理解しようとするれば、こちらまでそれに飲まれるだろう。

私がすべきことは変わらない。

捜査官としての有用性と、忠誠心を証明し、そして失ったメモリを取り戻す。

そして私こそが真のアンジェラ・バルザックだと示す。

必ず、示してみせる。

——そう'アンジェラは誓った。